

病児保育奮闘記

(8)

子どもサポート H&K

大石 仁美

経営は大丈夫?! ん〜?

動き出してはや13年。われながらよくやってきたなあ〜と思います。皆さん経営が成り立っているのが不思議らしく、起業したいと思って見学に来られる方は、まずそこが知りたい。赤字ですか？黒字ですか？と聞かれても基準がないので答えようがなく困ってしまいます。そもそも儲けるといふ発想がないのです。あればよし、なくてもよし。これでは人様にアドバイスなど出来るはずがありません。ゆとりがあるんでしょと思われる方があるかもしれませんが、あると言えばある、ないと言えない。あるがまま、為すがままです。

私は仕事は楽しいのが一番だと思っています。いやいやながら仕事をして自分のためにならないし、ストレスがたま一方でしょう。それよりも対相手の人に失礼というもの。おもしろくないならサッパリと辞めて、違う仕事を探したらいい。仕事は、「しんどいけど楽しい！」のがいちばんいいと思っています。

当然のことながら、仕事は稼ぐことだけが目的ではないはず。いまやりたいこと、やれることを

精一杯やる。そこから新たな発見や、人とのつながり、喜びや感謝、希望や意欲が湧いてきて、充実感に満たされる。お金はあとからついてくるものだと思っています。これはいい恰好をして言っているわけではなく、実体験から本当にそう思っているのです。

今よりもっとお金を儲けるにはどうしたらいいかをいつも考えて生きている人たちがいますが、それも楽しい仕事なのでしょうが、価値観の違う世界に生きている人間にとっては、それを目的にすると、欲望がだんだん膨らんで、内部から自己破壊がおきるんじゃないかと思っています。

まったく呑気で、お金には無頓着な私ですが、よく考えてみると、そういう計算をして、先を見透す俊敏さは持ち合わせていませんから、脳のそういうことを考える部分が欠損しているような気がします。ぼんやりしているのはDNAの成せる業ですね。きっと。

新たな悩み 加齢には勝てない?!

さて、そんな私がこの2~3年前から悩み始めたのが、可笑しいことにじつは経営のことなのです。

私もパートナーもこの10年余りで確実に年をとりました。長時間の子ども相手の仕事は、やはり疲れます。引き際をいつにするのか、体力の限界を見極めつつ、見通しを持っていないと、利用者に申し訳ない。選択肢はふたつ。閉鎖するか、誰かに引き継いでもらうかです。利用者からは「なんとか続けてほしい」という切実な声があるのは確かなので、出来れば誰かに引き継いでほしい。定年退職した暇なおばちゃんではなく、若者でやってみようという人はいないものだろうか。場所を提供するにしても若者はお金がないだろうから、それは話し合いで何とかしよう。でもどうやって人を探す？大学の学生課に相談する？保育協会に行く？新聞広告？ハローワーク？それとも心当たりの保育士さんに片っ端から聞いてみる？さてどうしたものか。いろいろ考えても良い策が思いつきません。考えあぐねて動けないのは、経営が安定していないせいなのです。はたして、若者が家庭を持って子育てをしてくれるだけの収入が確保できるだろうか、これがかなり厳しい！まんまと載せて、潰してしまったなんてことにでもなったら、あと味が悪い。いやまてよ、若者は、発想が柔軟で、エネルギーもある。年寄が心配することではないかもしれない。任せてしまえばそれなりに上手くやっていくかも知れないではないか。そんな考えも頭をよぎりますが、踏ん切りがつかないまま時だけが無為に過ぎていきました。そんな時、息子が「母さんの跡を継いでもいいかなあ」と言い出したのです。予想もしない申し出にびっくり。息子に跡を継がせるなんて思ってもみなかったのです。「ホンマにやる気?」「母さんさえよければ」「うーんムム・・・」

思いもかけない展開になってきました。理由はあえて聞かないことにしました。いい年をした大人です。それなりに思うことがあったのでしょう。

彼は数か月かけて勤務先の社長を説得し、半年後に退職して我施設の職員になりました。もちろん見習いです。その後試験を受けて保育士資格をとりましたが、自分の子育て以外に実体験がないのも心配で、保育所実習にも行ってもらいました。広い目で子どもを看てほしい。それと、ベテラン保育士さんから現場で学ぶことは多いはず。大勢の子ども達の中で、一人一人の子どもにどう接しているのか、集団の遊びを通して、子どもは生き生きとどんな表情で、なにをして、どう成長しているのか、学んでほしいことはいっぱいあり、そしてなによりも同じ世界の人たちとつながって欲しいという親心です。しんどくても必ず未来の支えになるはず。その意味を息子は理解し、頑張って乗り越えてくれました。

新しい出発

息子が加わってから、私たちの仕事への取り組み方も少しずつ変わってきました。もうすぐ傘寿を迎えるパートナーは、早朝の電話番号と受け入れが主な仕事になり、午後からは好きな歌の出前ボランティアで施設訪問を楽しんでいます。本当に彼らしい第三の人生です。

私は食事づくりが主な仕事になり、あとは保育補助です。保育は息子が中心になってやってくれるので、身体の負担はかなり減りました。それに息子がこんなに子ども好きだったとは意外な発見でした。「お兄ちゃん先生」と呼んで子どもたちが慕うのです。これはやはり嬉しいことです。

これから私がやるべきことは、息子がこの仕事を続けていけるよう、環境を整え、道をひろげておくことでしょうか。これはあとを譲るものの責務だと思うのです。それでまずはアクセスしやすいホームページ作りを業者に依頼しました。必要な投資は惜しんではいけないと思うので、これは少しずつ功を奏しています。次に機会があるごと

に研修の場に送り出すこと。せっかく根付いた根を太らせてやらないと申し訳ない。彼の人生をつぶしてはいけないと心から思うのです。人生の途中から全く違う職に転職した者への配慮はそれなりに必要だと思うので、これを親の過保護だとは思っていません。

ライバルにどう対抗する!?

いままでは他の施設は病後児施設でしたので病児を預かる我施設のライバルはいませんでした。ところが数年前から市の補助を受けている施設に病児を預かる場所が出てきました。おもしろいことにどの施設も、開設の前に、我施設に見学にみえていて、こちらも好意的に対応しています。仲間が増えることが嬉しかったからです。安くて病児を預かってくれる施設を、多くの人が待ち望んでいるのですから。利用料が高くて、我施設が使えない人たちのことが気がかりでしたので、そうした施設の出現は大歓迎でした。

ところが、その中の一つの施設が強力なライバルとして、我施設を脅かし始めました。会員数が減ったわけではありませんが（むしろ会員は少しずつ増加傾向）、日常の利用者は3割近く減りました。なにしろ、料金が安く、病院併設なので安心なのでしょう。それに預かる子どもたちの数が多いのです。それでもキャンセル待ち。申し込んでも、なかなか順番が回ってこなくて、どうしようもない時にうちを利用するというふうに、二股をかける利用の仕方が定着してきたのです。

もちろん、子どもサポートがお気に入り、うちしか使われない会員さんもいらっしゃいます。古い会員さんは、子どもが馴染んでいて、「子どもサポートに行きたい」と子どもが言うようになるようです。ありがたいことです。でも3割減は経営上かなりの打撃です。

しかしよく考えてみると、会員数が減っていないということは、急なときのお迎えと、いつでも

受け入れてくれるという安心は確保しておきたいということでしょう。うちとしては、会員が多くて日常の利用者が少ない方がじつは有難い。少ないスタッフで、一人の子どもにじっくり向き合え、会費はしっかり入ってくるということです。これはむしろラッキーなことではないですか。そう考えると、これはライバル関係ではなく、共存関係ということになります。相手が分かって、こちらの立ち位置もはっきりしてきました。

補助金を貰っての経営は？

さて、遊び心で、補助金を貰っているところの経営はいったいどうなっているのか好奇心もあり調べてみますと次のようでした。



最もごわいライバルさんだと思っていた施設は、一日10人以上預かっているようなので、少なくとも年間2000人以上看ていることになります。いつも予約でいっぱい、キャンセル待ちが多いようなので、これより少ないことはあり得ません。仮に2000人とすると補助金は

基本額 240 万円+2190 万円=2430 万円となり
これに人数分の診察代が加わりますので、
さて、いくらになるのでしょうか？いずれにしろ
かなりの収入になるでしょう。

もし、子どもサポートH&Kが補助金をもらった
としたら、(あり得ないことですが) 次のように
なります。



補助金を受けた方がずいぶん得な計算になります。
一日の定員を 4 人にするだけで補助金 1400
万円が手に入りますから、これはもうダントツで
補助金組が有利ですね。でも私たちとは理念が異
なるので、お互いに違うやり方で、すみわけをす
るしかありません。こうして整理してみると目標
金額も明確になりました。面白いものです。

最近うれしいことに、一度離れたお客さんがポ
チポチ帰って来始めました。やはり、急に仕事を
休むことが出来ない職種の人にとっては、キャン
セル待ちというのはつらいものがあります。精神
的にイライラするのは当然です。それと病気の時
ぐらい子どもをゆっくりさせてやりたいという親

心です。泣き叫ぶ子どもたちが大勢いる中では、
眠れないですね。

先日こんなことがありました。他府県に引っ越
しされるといの方のご夫婦で挨拶にお見えになり、
引っ越し先には探したけれどこのような施設がな
く、ここでお世話になったことがいまさらながら
にありがたく、心置きなく働けましたことお礼申
上げますとおっしゃいました。なんとご丁寧な
方でしょう。そんなにも喜んで頂いていたなんて
涙が出るほど嬉しかったです。

私たちの施設は、ただの預かり場ではない。人
と人が繋がっているということ。愛されているの
ですね。これがいちばんの強みですと胸を張って
これからも仕事をしていきたい。

それから出来ればもう一人、息子と共同経営し
てくれる若者が参入してくればこんな有難いこ
とはありません。

今の経営方針を守りながら、今一つ、なにか光
るものをプラスできれば未来は必ず拓けるという
確信に似たものが私のなかに湧いてきています。